

中国の都市空間にみる「圧縮式現代性」
—深圳華僑城における空間の表象と実践をめぐって—

李 小 妹*

‘Compressed Modernities’ in China’s Urban Space:
Practice and representations of space in Shenzhen Overseas Chinese Town

LI May

Abstract

This article explores the process of the production of urban space in the reform era of China, by focusing on spatial practice and representations in Shenzhen Overseas Chinese Town, especially on its first designer, Ma Zhimin’s design and practice in building China’s first theme park: Splendid China. Also through a close reading of Eric Ma’s studies on the unique ‘compressed modernities’ practiced and lived by migrant workers in Shenzhen Municipality and the Pearl River Delta, this article aims to examine the validity of Henri Lefebvre’s ‘trialectics’ of spatiality on the reading of China’s urban transition.

Key words: urban space, spatial practice, representations, Compressed Modernities, Shenzhen Municipality, China

1. 研究の目的

中国は、過去30年の間に先例がないスケールと速度でその都市空間を変貌させてきた。ジョン・フリードマンは、歴史的な視座から中国の都市化について分析し、「グローバルなフローな空間の構成要素」に変貌した中国が独特で重層的な「都市化の物語」を組み立てていると論じた (Friedmann 2005)。

筆者は1997年の夏に、この物語の中心的存在である深圳を初めて訪れた。当時の深圳市はすでに500万人の人口を抱え、一人あたり地域総生産約20,000元にも上る経済都市に成長していた。林立する高層ビルと華麗なショッピングモール、ウォールマートやマクドナルド、香港のワトソンズと日本製ゲーム機が並ぶゲームセンター、欧米のポップソングが流れるカフェーとネオンサインで煌びやかに装飾されたバーやクラブなど、そこには現代的都市風景が展開されていた。同時に深圳には、カオス的な多様性と矛盾も存在した。小さな飲食店街に無秩序に並ぶ中国のあらゆる地方の料理専門店、下町の商店街で交わされる様々な方言、都心の公園の中やクラブの外で花を売り歩いて生計を立てる小さな女の子…等々。深圳中心街の歩道には「美しい現代化都市を創ろう」と白地に赤い文字のスローガンが書かれた大きな看板が掲げられていた。ある時、ひとりのホームレスらしき男が、その看板の前にあるゴミ箱に近づき、何かを拾って口に入れるのを見た。

深圳の都市空間は、秩序と無秩序、繁栄と困窮、都市的なものと農村的なものとの混在に特徴づけられていた。『空間の生産』の中で、アンリ・ルフェーブルは「生産様式の過度期は新しい空間の生産をかならずともない」、また社会的生産関係における「諸矛盾はかならず空間に刻印を押し、空間を変革する」(ルフェーブル 2000 :

キーワード：都市空間、空間の表象、空間の生産、圧縮式現代性、深圳、中国

*平成20年度生 ジェンダー学際研究専攻

93) と指摘している。ルフェーブルは、空間の生産を「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」という3重の概念から捉えている(ルフェーブル 2000)。「空間的实践」とは、国土空間、都市の交通網、都市間ネットワークなど、実践感覚によって創出される空間であり、「知覚される空間」である。近代の空間的实践は産業化、商業化、視覚優位などの特徴をもっている。「空間の表象」とは、知、記号、規範などを用いて構想される空間であり、都市計画家や建築家などの専門家によって秩序づけられる空間である。「表象の空間」とは、芸術家によって新たに意味付けられる空間であり、人々によって生きられる経験的空間である。「表象の空間」は「空間の表象」によって構想された空間的秩序に挑戦し、新たに意味付けることで「空間的实践」に新しい可能性と方向性を与えるのである。「空間的实践」は「空間の表象」を利用して土地の計画利用や不動産開発を進展させ、「表象の空間」の活用を通じて空間をスペクタクル化された観光商品にする(ルフェーブル 2000; 齊藤 2003)。

本研究はこのルフェーブルの枠組みに依拠しながら、深圳という全く新たに出現した都市空間がどのように創り出され(空間的实践)、表象されているのか(空間の表象)を考察したい。その中で本稿が注目するのは、深圳の中心部にある深圳華僑城という改革開放初期に開発された空間の生産過程と、その初代開発監督者、馬志民(1932-2006)の開発理念と実践である。そして、人々によって生きられた空間(表象の空間)としての深圳のありようについては、もう一人の馬、都市文化研究者の馬傑偉の研究に焦点を当てて検討していく。馬傑偉は、深圳の都市空間を伝統的農業精神からポストモダンのカオス的な表象までといった多様なモダニティが短期間に圧縮された特殊な現代性、すなわち「圧縮式現代性」を成しているという(馬 2006)。

2. 研究対象の概観

2.1 深圳市の概観

深圳市は珠江デルタにあり、広東省の中南沿岸に位置し、香港に隣接している。深圳市は10つの市轄区¹から構成され、1991.64km²の総面積を有する計画単列市²である。深圳市の常住人口は1054.74万人、うち約287.62万人が深圳の都市戸籍を有し、地域総生産は12950.08億元に上る(2012年深圳市統計局)。経済力において上海、広州、北京に匹敵し、消費においては、2009年一人あたり年間可処分所得が29,244元、消費額が21,526元でいずれも全国一位を占める³。1980年に深圳市内327.5km²の敷地が経済特区⁴に指定され、そこで外国資本や技術の導入が認められ、輸出向け製品を生産する工業地区が設けられた。このほか、華僑資本に対する免税や工業用地の無償貸出など特別な優遇政策が取り入れられている(小野寺 1997; 矢吹 1992; 西田 2006)。

本研究が考察の対象とする深圳華僑城は、中国が市場経済を取り入れることで生み出された実験都市・深圳に、中国政府と華僑資本が創り出した資本主義的レジャー空間である。1985年に中国国務院華僑事務局と香港中国旅行社によって設立され、深圳最初の都市計画の事例であるとともに、観光開発のモデル事例ともなっている。

2.2 深圳華僑城とOCT

深圳華僑城は、深圳市南山区に位置する。総面積6 km²の敷地に、国内外で知られている錦繡中華(1989年開業)、中国民俗文化村(1991年)、世界之窗(1994年)と歡樂谷(1998年)という四つのテーマパークがある。これらのテーマパークのおかげで、深圳華僑城は北京の故宮や西安の秦兵馬俑博物館と並んで、中国観光部門最高級の5A級観光スポットに指定されている。深圳華僑城の中には、テーマパーク以外にも、スペイン文化をテーマにした華僑城グランドホテル、イタリア文化をテーマにしたベニスホテル、イタリアの港町Portofinoをテーマにしたポルトフィーノ⁵高級住宅区など、海外の景観をモチーフにし、テーマ化された空間が多く見られる。また何香凝美術館(1997年開館)、廃棄工業施設から改築されたロフト式商業空間、イタリアの街をテーマにした高級住宅街など、現代的都市の生活スタイルを謳歌する観光・住居・消費空間が配置されている。深圳華僑城は、それ自体が一つのテーマパーク化された都市空間であり、そこにはまた華僑城集団(Overseas Chinese Town Group)の本拠地ともなっている。

深圳華僑城の経営母体である華僑城集団(以下OCT)は、総資産1000億元にのぼる上場企業で、中国国務院の国有資産監督管理委員会が直接管轄する117の中央企業の一つである。OCTは観光開発、不動産開発及び家電通信の生産販売を中核事業としながら、ホテル開発運営や包装材の生産販売など、その他各種事業をも行っている。

る⁶。OCTのすべての事業が国家的スケールで展開されている⁷。OCTが経営する20のテーマパークは年間入場客数が3000万人に上る。OCTは、1990年代末より、テーマパークを中心とした都市型観光施設の開発と同時に、周辺地域での商業開発また住宅不動産開発にも着手しており、「観光開発＋不動産開発」の事業モデルを強化しながら、さらなる成長を遂げている。

2.3 深圳特区華僑城と香港中旅集団

深圳華僑城の前身となるのは、沙河華僑工業区である。沙河華僑工業区は、鄧小平の指示のもとで、1979年にかつて国務院華僑事務局が直接管理する国有農業企業の光明華僑畜牧場沙河分場⁸を基に、華僑・華人の資金、技術、人材を導入するための窓口として開設された。1985年国務院華僑事務局は、さらなる経済発展を企図して、沙河華僑工業区12km²の敷地のうちの4.8km²を深圳特区華僑城⁹として開発することを決め、その開発権限を香港中旅集団（China Travel Service Hong Kong）に委託した。

香港中旅集団（以下CTS）の前身は香港中国旅行社¹⁰で、華僑城の開発主体になると同時に香港中旅集団に改編された。それに続いて、1986年5月に国務院国有資産監督管理委員会に所属するOCTが設立された¹¹。こうして、深圳特区華僑城の開発は中国・香港合資のプロジェクトとして始められた¹²。CTSは国務院華僑事務局の監督管理のもとにありながらも、華僑資本・外国資本として、経済特区内で設けられた経済優遇政策を受けていた。

OCTとCTSは、華僑城の開発を端緒に、中国政府の経済改革の恩恵を最大限に受けながらともに成長した。二社の経営リーダーには、代々中国の中央政府から行政機関に勤務経験のある共産党幹部が派遣される¹³。他方では、国務院華僑事務局の重要なポストにもまた帰国華僑が任命されることが多い。華僑城の開発主体の内幕は中国の経済改革における中国政府と華僑との間にある複雑でダイナミックな関係性を反映している。CTSが1999年に国務院華僑事務局から国有資産監督管理委員会の直接管轄の下に移され、中央企業となった。それによってOCTは、深圳華僑城の唯一の経営母体となり、深圳華僑城の中外合資の性格を過去のものにした。OCTとCTSは、最初の合資経営から、協力関係に、時折競争関係にさえあるという変化に富んだ性質を見せている。

深圳華僑城というテーマパーク化された空間と、現にOCTに多大な利益と成功をもたらしている「観光開発＋不動産開発」という事業モデルの基盤を築いたのは、華僑城開発の最初の10年間を通してCTSとOCTを率いた馬志民という人物である。

3. 中国テーマパークの父：馬志民

「華僑城で中国のパナソニック、中国のディズニーとシンガポール式ガーデンシティを創る」(新華社名人書冊編集委員会 2000:73)。これは、CTSの創建者の一人で深圳華僑城の創始者、馬志民が呈した目標である。中国のパナソニックはOCT傘下の康佳集団（KONKA Group）を指し、中国のディズニーは深圳華僑城のテーマパークを指しており、そしてシンガポール式ガーデンシティは、深圳華僑城の空間全体を指している。馬志民は、中国初のテーマパーク、錦繡中華を企画し開発したことで、中国テーマパークの父と称された。以下では、馬志民の開発理念と実践を振り返りながら、深圳華僑城のテーマパーク化された空間がどのように生産され表象されてきたのかを考察してみよう。

3.1 ガーデンシティと観光開発

馬志民（1932-2006）は、広東省台山市白沙郷の華僑家庭に生まれた。若くして広東抗日ゲリラ隊に入隊し、1949年に新中国が成立した当時は人民解放軍の連絡員として九龍税関（現深圳税関）に勤務していた。1958年に宝安县（深圳市の前身）深圳鎮共産党委員会書記となり、1959年から61年までは深圳ダムの建設責任者を務めた。1966年から74年まで、文化大革命期の下郷運動に巻き込まれ、広東省惠州の農村にある「五七幹校」（労働改造農場）に下放されていた。1974年に下放先から広東省共産党委員会統一戦線工作部に異動し、後に広東省華僑・外国事務オフィスに務めるようになる。1979年には国務院広東省華僑事務局に異動し、同年華僑事務局によって襄理（日本の課長に当たる）として香港中国旅行社に派遣された。

1985年当時、CTSの副理事長兼総経理を務めていた馬志民は、深圳特区華僑城の開発が発足すると同時にその総監督官に任命された。中国政府の華僑事務局が提案したのは工業を中心とする多機能開発区であった。当初、深圳経済特區内においてすでに工業主導型の経済開発が五年間も進められており、他にも14の東南沿岸都市でさらに経済技術開発区が設けられていた。それゆえ、経済特別区として深圳はすでにその優位性を失いかけていた。その中で、馬志民が構想したのが、科学的で合理性のある空間づくりと観光開発との結合だった。「市街地区の計画が科学的で合理的であること」、「建築物に特色があること」、「環境が清潔で優美であること」、「街の風貌が高尚で文明的であること」との計画案を提示し、「ガーデンのなかで城を創る」という理念を提示した。馬志民の開発理念は、1960年代以降シンガポールで展開されてきた「ガーデンシティ」と「シティ・イン・ガーデン」という都市再開と無関係ではない。1986年に馬志民は、シンガポールやオランダなど多くの国と地域で活躍する都市計画家の孟大強（Meng Ta Cheang）¹⁴を年俸11万米ドルで華僑城の都市計画顧問として雇った。しかし、華僑城がシンガポールのガーデンシティと根本的に異なるのは、一般住民のための住宅や公共空間ではなく、テーマパークというレジャー空間を生産したことである。中央政府による工業を中心とした開発案に従わずに、馬志民は観光開発に注目した。そこには彼の香港中国旅行社での勤務経験と業界知識にもとづくこだわりも作用していたと想像される。しかし、当時輸出志向型の製造業や金融などの外向型経済の推進が急務だった中国政府は、レジャーや観光事業には消極的であり、馬志民の観光開発の計画に対しては批判の声が高かった（郭2009；新華社2000）。また、同じ時期に中央の反精神汚染運動の余波や学生による民主運動など、社会がきわめて不安定な状況にあった。こうした状況の中で馬志民が最初に創ったのは、中国のディズニーではなく、小人国（Little China）だった。

3.2 Little ChinaからSplendid China（錦繡中華）へ

馬志民は華僑城の開発案を練るためにヨーロッパに行き、テーマパークやリゾート地などの観光施設を見回った。彼は深圳華僑城で遊園地建設などの試行錯誤を経て、最終的に中国の歴史と文化をテーマにした小人国（Little China）を造ることに決めた。それは、オランダを訪れた時に、ハーグ市にあるミニチュア遊園地のマドローダム（中国では荷蘭小人国と呼ばれる）からインスピレーションを受けたことがきっかけだった。小人国の建設に当たって、1986年より馬志民は、中国内陸や香港から芸術家、歴史家、建築家、園芸彫刻技師などの専門家を深圳に集め、数回にわたって小人国の設計建設研究会を開いた。中国の国章や人民幣第2版の設計者で著名画家の周令釗、中央美術学院副院長で人民幣第3、4版の設計者で画家の侯一民、香港建築家の龔書楷（Sherman Kung）などが研究会のメンバーとしてあげられる。研究会によって以下の建設原則がまとめられた。すなわち第一に、中国の領土に基づいて展示建造物を配置すること；第二に、展示モデルは明清以前の歴史を表すものに限定すること；第三に、展示建造物は、①中国の歴史文化を代表する名勝旧跡、②中国の民俗文化を代表する住居建築、③中国の自然美を最もよく表せる自然景観とすること。悠久な歴史、多様な民族文化と豊穡な自然を有する「美しい中華」を観光客に呈示することがテーマパークの趣旨とされた（馬志民1989；華僑城編輯部2009）。当時中国中央美術学院副院長を務めていた侯一民は、テーマパークの名前を「小人国」から「錦繡中華」に変え、錦繡中華の概念図を描いた。万里の長城、ポタラ宮殿、阿里山、秦始皇陵兵馬俑、黄帝陵など、中国の21の省から80箇所¹⁵の名所旧跡、自然景観、住居建築が展示モデルに選ばれ、展示物の縮尺は1/15に決められた。こうして1987年1月にCTSによる1億元の投資のもとで、総面積30万m²におよぶ錦繡中華の建設が開始された。

錦繡中華は1989年9月22日に開園し、中国本土で造られた最初のテーマパークとして国内で大きな話題となった。同年11月24日に中央テレビで錦繡中華および華僑城に関するドキュメンタリーが放送され、その中では、錦繡中華が「世界最大のミニチュア展示のテーマパーク」、「世界に中国の歴史と文化を展示する場」として位置づけられた。錦繡中華は、紀元前2500頃に存在した中華民族の始祖とされる黄帝の陵墓から20世紀初頭を生きた「中国革命の父」と称される孫文の陵墓までの間にある歴史時代に限定した表象である。中山陵の展示は、建設原則が定められる当初には考えられていなかったが、後に追加された。そこには孫文こそが中国に「中華民族」という概念を、彼の「三民主義」とともにもたらした人物であり、すべての中国系人口にとって時代と国境を超えた絆の象徴であるという価値づけがあった。展示物の空間的配置からは、明らかに現在の領土空間の表象が意

識されている。台湾の阿里山や海南島の五指山、チベットのポタラ宮殿や、内モンゴルのチンギス・カン陵などの展示も領土空間の表象の証拠といえる。錦繡中華における空間の表象には、歴史的な統一性の表象と現在の領土支配の表象へのこだわりが示されると同時に、民族政治への主張が見られる。ペイ族とトン族の住居建築、モンゴル族のゲルなど少数民族の住居建築、また新疆の香妃墓と内モンゴルの昭君墓の展示などがその例である。とりわけ香妃墓と昭君墓の展示は、それぞれ今の新疆と内モンゴルという地理的空間を表象しながら、中国歴史上の清と前漢における中央政権と周辺民族との統治、支配—従属的な関係性を暗示している¹⁶。こうして、社会主義と資本主義との分断を想起させない、世界のあらゆる場所に生きる中華人が誇りに思えるような“美しい中華”という空間が表象され生産されたのである。

錦繡中華における空間の表象を創り出したのは、馬志民と彼が引率する専門家グループである。グループの構成員として、まず馬志民、王謙宇、張整魁など華僑出身若しくは華僑事務局の勤務経験をもつ企業家や知識人が挙げられる。また、周令釗や候一民のような権威ある美術家や建築家がその中核をなしていた。ほとんどのメンバーは新中国が成立する前に革命家として活動し、その後建国事業に貢献し、また文化大革命の影響も同様に受けた経験を持つ。中国政府や共産党党内から反対の声が多く出たにもかかわらず、錦繡中華が最終的に開園し、中国人や華僑の間で好評を博するようになった理由とは、華僑事務局および知識界で権威的な地位をもつ専門家による支持があったからに他ならない。

3.3 「中国のディズニー」へ向けて

馬志民は華僑城で「中国のディズニー」を創ると宣言した。そして、彼が引率する専門家グループは1989年、1991年、1994年と、相次いで「錦繡中華」「深圳民俗文化村（以下民俗村）」と「世界之窗」という「ディズニー化」された空間を創り上げていく。

錦繡中華が開園して半年後、その姉妹園とされる民俗村の企画と建設が始められた。錦繡中華を創り上げた専門家グループに、西安交通大学卒の経営管理学博士の王剛、中国一流の振付師（choreographer）の林樹森など華僑城の次世代リーダーたちも加わった。1991年10月に開園した「民俗村」（20万m²）では、22の民族の24の「伝統」家屋・宗教建築が展示されている。専門家グループは、静的ミニチュア展示に特徴づけられた錦繡中華との差異化をはかり、民俗村においては実物大のパビリオン、民族衣裳姿の少数民族の若い男女による生のパフォーマンス、観光客参加型のイベントや祭りなどを通じて観光客に現実味のあるパフォーマンスな空間を表象し創りあげた。さらに、20数カ所のギフトショップの他、数カ所の飲食店、追加料金が必要となるアトラクションやナイトショーなどが設けられた。民俗村における空間の表象は、「民族」とりわけ「少数民族」の可視化による多民族国家を表象する点においては錦繡中華のそれに一貫性を見せながら（李 2010、2012）、その重心は消費中心主義と消費者文化へと移行していった。

1994年6月に開園した「世界之窗」においては、空間の表象はヨーロッパ中心主義的現代性や消費中心主義と消費者文化、とりわけアメリカンスタイルの娯楽消費など、さらに重層的でハイブリッド性格を見せる。馬志民による「中国に世界を知ってもらおう」という趣旨のもとで、50の国と地域を代表する108点のミニチュア展示物が造られた。アンコールワットやタージマホールなどのミニチュア展示を通じて「神秘と美のオリエンタル」の《アジア》、実物の1/3の縮尺（108m）で複製されたエッフェル塔で「現代的ロマン」の《ヨーロッパ》、1/100の縮尺で丸ごと再現されたマンハッタンの街。ここでは、ヨーロッパ中心主義的な世界観が表象されるとともに、欧米の近代性と現代文化が、場所の文脈を超越して移植され、空間の表象の中心に位置づけられている。パリのシンボルであるエッフェル塔は現代西洋文化の記号として複製され、深圳のシンボルともなっている。世界之窗の“エッフェル塔”は、夜になるとライトアップされ、人々に現代の不朽の神話を語り続ける（李 2010）。その一方、錦繡中華は、惑星の名¹⁷にもなって永久に輝く美しい中華帝国の神話を物語っている。世界之窗の空間の表象を担う専門家陣には、馬志民が引率する錦繡中華・民俗村のメンバーに、さらに新世代の演劇家や芸術家や経営者などが加わった。深圳歌舞劇団団長兼世界之窗の芸術監督の付宇などの新メンバーによって、世界之窗における現代性の表象は、現代性、消費中心主義、芸術志向などと結びつきながら、さらに多様化しハイブリッド化されていく。そこでは消費中心主義を謳歌する様々な国際文化祭やメディア放送などのイベントが日々のように行われている。歌舞劇団による豪華な舞台演出と各国の文化祭りの他に、国際ビア祭り、国際ロック音楽祭、

ツーリズム・カーニバル祭りなど、芸術志向、現代性と消費者文化が融合され、呈示されている。それは近代都市に特有のスペクタクル化の実践である（ハーヴェイ 2006）。

馬志民（1989：1）が「世界に中国を知ってもらう」「中国に世界を知ってもらう」という思考に基づいて創り出したのが、「歴史と伝統」の錦繡中華・民俗村と「現代的」な世界之窗というテーマパーク空間であった。この「歴史と伝統」／「現在と現代的」という二項対立的思考方式とそこに表象された大きな物語は、深圳華僑城だけでなく、深圳市の都市空間全体にも刻まれている。深圳華僑城における大きな物語の表象を背景にした、テーマ化、マーチャンダイジング、パフォーマンス労働、ハイブリッド消費といった「ディズニー化」空間（Bryman 2004）の生産は、馬傑偉が定義づけた「圧縮式現代性」と重なる。

4. 「圧縮式現代性」と空間の生産

4.1 馬傑偉の圧縮式現代性

馬傑偉は『バー・工場：南中国都市文化研究』（2006）と題した著書の中で、珠江デルタの都市空間において、欧米先進諸国のそれに比べ、よりハイブリッドでカオス的な性質が見られるとし、それを「圧縮式現代性」と名付けた。馬傑偉は、この特質が工業化以前の農民精神と農耕社会の伝統、農村地域に突如現われた工業団地、また資本が高度に集中するメトロポリス、さらにポスト・メトロポリス的な都市化といった多様な社会形態が短時間かつ高度に圧縮して生み出された結果であり、きわめて中国的な性格をもつと主張している（馬傑偉 2006：5）。

馬傑偉は、この「圧縮式現代性」という性質をみせる都市空間を生きる住民に焦点を当てる。彼は2001年から2003年までの期間において、深圳市内にあるダンスクラブ（TC Club）と広東省東莞市長安鎮にある永成という労働集約型（玩具）製造工場（以下永成工場とする）でフィールドワークを行い、パフォーマンス労働をするクラブの従業員と生産ラインに立つ出稼ぎ労働者、とりわけ彼／彼女の日常生活と身体に注目する。馬傑偉は、出稼ぎ労働者が身体改造やプライベート関係の再構築などを通じて「圧縮式現代性」を想像し、学習し、また実践する、「社会空間を生きる」という実態を記述している。「社会空間を生きられる経験の全体性においてとらえるということは、空間を身体との結びつきにおいて捉えるということの意味する」（斉藤 2003：143）。馬傑偉による都市空間の現代性と身体との結びつきに関する民族誌的記述は、《空間の生産》の三元弁証法の一つである《表象の空間》の考察に有用な素材と方法論を提供してくれる。

4.2 構築される現代的身体と主体性の再構築

馬傑偉によれば、現代的生産工場はもっとも強力な規律訓練の場であり、出稼ぎ労働者の身体と日常生活を、伝統的農業精神から剥離させて、現代的な日常生活に再構築する。この身体と日常生活の再構築は時間的空間的制約とその管理を通して実現される。永成工場において、労働空間はもちろん、食事と生活空間も統一的な管理に置かれている。すべての人が二段ベッドで10人前後が共用する寮で暮らし、一日の三餐を工場の食堂で決められた時間帯でとる（馬傑偉 2006：236）。こうして民工の身体は、その日常生活のリズムとともに徹底的に再構築される。身体と日常生活に対する「規律訓練」と「再構築」こそ、農村から都市工場にやってきた出稼ぎ民工が最初に体験する現代性である。この現代性に対して、出稼ぎ労働者は「慣れた」「適応した」（馬傑偉 2006：22）と言いながら、それを受容している。こうした受容はダンスクラブの従業員にも見られる。クラブの従業員はまず外見と体型がよいとされる人しか雇用されない。それに、おしゃれで現代的な消費空間の成員になるために、髪型やファッションがそれに合うように改造される。さらに、すべての従業員は英文の名前が与えられる（馬傑偉 2006：30）。このように従業員の身体から名前まで、経営者による現代的消費空間の表象と生産のプロセスに取り込まれている。しかし出稼ぎ労働者は、単に恣意的に規律訓練され構築される身体に留まてはいない。

馬傑偉は、「工場労働は労働者を搾取する。しかし、農村の若者にとって、工場生活は彼／彼女らを伝統の束縛から解放してくれる」（馬傑偉 2006：25）と言い、こうして規律され構築される身体から主体性の再構築の可能性をも見出そうとしている。永成工場の女性民工は工場周辺にあるスーパーで商品を自由に見、自由に触れるという「民主」と「自由」を愉快地感じ取る（馬傑偉 2006：24）。また、伝統的な農村社会を脱出してきた労

働者、とりわけ女性民工は、交友・恋愛・婚姻といったプライベートな関係をより自由に設計し選択することができるようになる。TC Clubの従業員もまた経理に与えられた英文名前を「身につけて」、「西洋化された新人」という都市的アイデンティティに喜びを感じ取っている（馬傑偉 2006：31）。日々の労働現場で目にする都市的消費と生活スタイルに刺激され、労働を提供するだけの存在から消費する主体に変わろうという欲望が生まれてくる。こうした都市的生活への夢と欲望は、新たに生産された空間の副産物でありながら、空間の表象に新たな可能性を希求する動機づけともなるのである。

馬傑偉はその著書で、劇的に変貌しつつある中国都市における表象の空間（馬はエドワード・ソジャ（2005）の《第三空間》の概念を用いているが）の例を示してくれた。都市に来た労働者は伝統的農村社会から脱出したとはいえ、遠く離れた故郷にある血縁や地縁などの伝統的な力に依然として影響されている。民工は伝統的な力と妥協し、利用することによって、都市空間の中でネットワークを創り上げていく。このネットワークは村から来た新人を受け入れ、新しい都市空間へと導き、都市空間にあるさまざまな危険から守る役割も果たす。そもそも、都市へ移動すること自体、現代市場経済の力と都市空間にある伝統的な家族や同郷のネットワークの力の両方の作用によるものである（馬傑偉 2006：27）。

5. 結語

本稿では、改革開放後の中国において、まったく新たに出現した現代都市空間である深圳の都市空間の生産を、前半では華僑城の創始者である馬志民の思想と実践に焦点を当てながら論じた。後半では、急激に構築された都市空間で「圧縮式現代性」を生きる人々の現実について、都市文化研究者の馬傑偉の研究に依拠しながら、語ってきた。

これをルフェーブルの空間の生産の3つの概念（「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」）に当てはめて解釈するならば、次のようなことが言えるだろう。

「空間的实践」として、中国政府による深圳市の設立、経済特区の設置、深圳華僑城開発区の建設計画、テーマパークや華僑城の社宅、OCT本部前の牛の彫刻に至るまでの物質的な都市空間の生産が挙げられる。馬傑偉は珠江デルタの都市空間が中国的な「圧縮式現代性」を見せていると論じた。深圳の物質的な都市空間の生産すなわち「空間的实践」は、馬傑偉が定義する中国的な「圧縮式現代性」の基盤を与えている。

「空間の表象」として、馬志民の思想と実践は改革開放以降に創り出された中国の都市空間に消費文化とスペクタクル化という大きな方向性と、中国の歴史・民族文化と欧米の現代的消費文化の接合という価値づけを提供した。この意味において、馬志民は「中国のテーマパークの父」よりむしろ「中国のテーマパーク化された都市空間」の創始者と言ったほうが正しい。新たに生成した深圳の都市空間に展開されたこの「空間の表象」は、グローバルな資本主義の原理と中国のナショナルな枠組みの接合という難問に対する洗練された回答であったといえるかもしれない。ただし、馬志民の後に次いで中国の「空間の表象」を担う専門家たちは、新たな都市空間にたえず新しい表象を加えている。それによってより圧縮的でハイブリッド空間が生産されていることも付け加えなければならない。

最後に「表象の空間」である。深圳にやってきた移住者たちは、すでに秩序づけられ管理され現代的に表象された空間のなかで生きることによって、与えられた「空間の表象」を受容し、それに合わせるように自己改造（髪型やファッションなどの身体改造）し、あるいは改造されている。その中で自らの解釈を加えながら都市的生活様式と現代性を想像し、学びながら実践している。また移住先の都市空間において血縁・地縁などの絆によって形成される社会的ネットワーク活用している。これは与えられた「空間の表象」に「表象の空間」をもって抵抗する実践としてとらえるかもしれない。しかし、「空間の表象」を用いた「空間的实践」が先行して創り出した深圳の都市空間は、馬傑偉の研究からも明らかのように、「空間の表象」が「表象の空間」を恣意的に操作し支配するという特徴をより強くもつと言えよう。

馬傑偉は「圧縮式現代性」を実践する主体が多様であると述べている。同様に「表象の空間」を担う主体も多様である。多様な主体によって経験され生きられる空間の生産についての具体的な検討は、筆者にとっての引き続きの課題としたい。

【参考文献一覧】

- 小野寺淳 (1997) 「中国における土地制度改革と都市形成—珠江デルタ地域、深圳市の事例から—」 アジア経済 38-6: 26-43.
- 齊藤日出治著 (2003) 『空間批判と対抗社会—グローバル時代の歴史認識』 現代企画室.
- ソジャ, E. W. 著, 加藤政洋訳 (2005) 『第三空間: ポストモダンの空間論的転回』 青土社.
- ハーヴェイ, D. 著, 大城直樹・遠城明雄訳 (2006) 『パリ: モダニティの首都』 青土社.
- 西田達昭著 (2006) 「現代中国経済の光と影」 京都大学国際教養学部紀要VOL 2: 117-129.
- 李小妹 (2010) 「華僑城とテーマパークからみる深圳の都市空間の生産—インターローカルな関係性の構築への考察—」. 2009年度お茶の水女子大学学内共同研究成果報告書 『グローバル時代のインターローカルな地域おこしの可能性と課題』 (研究代表者: 熊谷圭知): 43-70.
- 李小妹 (2012) 「深圳中国民俗文化村における〈少数民族〉の表象」. 『人間文化創成科学論叢』 第15巻: 311-319.
- ルフェーブル, H. 著, 齊藤日出治訳 (2000) 『空間の生産』 青木書店.
- 矢吹 晋 (1992) 『[図説] 中国経済』 蒼蒼社.
- Bryman, A., (2004): *The Disneyization of Society*. London: Sage.
- Friedmann, J., (2005): *China's Urban Transition*. University of Minnesota Press.
- 中国語参考文献 (拼音のアルファベット順)
- 郭國燦 (2009) 『香港中資財團』 聯合出版集團.
- 華僑城編集部 (2009) 『OCT華僑城』 総第19期～総第29期.
- 馬志民 (1989) 「錦繡中華開幕記念特刊」 『深圳特区報』.
- 馬傑偉 (2006) 『酒吧・工場: 南中国都市文化研究』 南京: 江蘇人民出版社.
- 新華社名人書冊編集委員会編 (2000) 『馬志民』 北京: 新華出版社.

【註】

- 1 20世紀90年代に設立された羅湖区 (商業中心地)、福田区 (市政府所在地)、南山区 (華僑城所在地)、塩田区、宝安区と龍岡区に、2007年以降に光明新区、竜華新区、坪山新区と大鵬新区の4つの新区が宝安区と龍岡区から分割され設立された。
- 2 計画単列市とは財政面において所在省の省政府を経由せずに直接中央の管轄下に置かれた行政体 (国家社会興経済発展計画単列市) のことであって、行政的に副省級市でもある。現在深圳の他に、大連市、厦門市、青島市と寧波市5つの計画単列市がある。
- 3 ジェトロ広州事務所 http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000525/china_shenzhen_style_all.pdf
- 4 経済特区の範囲は、設立当初327.5km²の市街地 (香港に向かい合う南沿岸の四つの区羅湖区、福田区、南山区、塩田区) だけであったが、2010年7月1日より市全体に拡大した。この時期に1979年の「中華人民共和国中外合資経営企業法」をはじめとして、市場経済に対応する様々な基礎法規条例が深圳で実験的に実施された (矢吹 1992)。
- 5 “華僑城波托菲諾純水岸” と総称される華僑城のこの高級住宅街は、その開発総面積が初期の3.5万m²から拡大しつつある。住宅街が7万m²の湖に隣接して造られ、敷地面積の60%が緑地で覆われている。住宅街の中には、スーパーや日本料理店やカフェやエステなど80軒余の店舗からなる“波托菲諾商業街” が設けられている。住宅街の北に華僑城ゴルフ場があり、東南にテーマパークの歡樂谷がある。11階建ての220~320 m²面積の高級マンションと湖に面する3階建て370m²の別荘から構成されており、平均単価が63,000元/m²にのぼる。住宅のテーマにされているPortofinoとは、イタリア南部海岸にある小さな観光港町である。
- 6 華僑城集团公司公式ホームページ <http://www.chinaoct.com> (2013年10月3日最終検索)
- 7 華僑城のテーマパークがブランド化され、上海市、北京市、天津市、安徽省、湖南省、雲南省など他地域の多くの都市でそのまま複製されたり、またその管理運営技術が移植されたり、独自の観光消費文化として中国全国に広められている。不動産開発事業においてそのガーデン・シティを創るという理念と実践もまた各地の不動産開発および都市建設の手にされている。それに、メディア事業に携わることによって、香港、台湾、マカオからはじめとする他地域や外国の情報と文化を大陸に宣伝している。
- 8 華僑農場とは、1950年代以降に中国政府が帰国定住する華僑 (主に東南アジアから逃れてくる華僑難民) を受け入れるために設立した国有農業企業のことである。全国的に84の華僑農場で人口59万人。設立当初から中央及び華僑事務局の管理を受けていたが、1985年以降地方政府の管轄下に置かれた。
- 9 “華僑城” という名前は、1984年に華僑事務委員会主任を務めていた葉飛が付けたものである。
- 10 香港中国旅行社は、香港中資銀行、香港招商局、中信泰富、華潤公司等と並び、有力の香港中資財団の一つとして、1949年新中国成立後に中国と外国との間に貿易通路を開通する役割を果たしていた。香港中国旅行社は、1928年8月に銀行家陳光甫によって上海で設立された上海商業儲蓄銀行という民間銀行の旅行部門から発展した旅行会社である。1949年5月に上海が中国共産党に“解放”された後、公私合営となった上海商業儲蓄銀行は米国の経済制裁を受け、米国にある膨大な資金が凍結される事態に迫られて、やむを得ず中

国国内の事業から完全撤退して香港支社に移動した。そして中国旅行社と改名した。経営不振のなか、当時の社長であった方遠謀が中国銀行香港支社に事業連携を求め、中国旅行社の経営権限を中国政府に委ねた。こうして、元の上海商業儲蓄銀行旅行部が香港中国旅行社となり、中国国务院華僑事務局の管轄に置かれた。当時から社内最高管理職の人事は、国务院華僑事務局から直接派遣されていた。1950年代以降、香港中国旅行者は、鎖国状態にあった中国政府の委託のもとで世界中にいる華僑・華人が中国を往来する際に必要な手続きなどの業務と、香港と内陸との間の鉄道貨物など交通と物流の業務を担当していた。現在、中央企業としての社名は中国港中旅集团公司になっているが、あいかわらず中国では唯一「香港及びマカオ居民来往内地通行证」と「台湾居民来往大陸通行证」の発行権をもつ企業である。

- 11 同年8月、さらに深圳特区華僑城房地產公司、華僑城貿易公司、華僑城物資公司、華僑城旅遊公司、華僑城園林公司、華僑城労働服务公司、華僑城水電公司与華僑城建築安裝公司の8社が子会社として設立された。
- 12 <http://qwgzyj.gqb.gov.cn/qwhg/124/250.shtml> 中国僑網「先行者」僑務工作研究 (2013年12月1日最終検索)。
- 13 香港中旅集團の最高責任者が中国中央国务院事務局によって任命される。馬志民と同じ時期に香港中旅集團の理事を務めていた梁靈光がアモイ市市長や福建省副省長、広東省長などの座についていた。そして梁の後任になったのは、元深圳市副市長の朱氏で、朱氏の後任は元国家建設部主任の車氏であった。華僑城集團の最高責任者も同様に中央もしくは地方政府より任命される。1993年から華僑城集團経営責任者に選ばれたのは、国家經濟委員会政策研究室や深圳市委の取締役に務めていた任克雷である。
- 14 中国国内ではシンガポールの建築家として知られているが、本人は北京出身で若い頃から家族とともに台湾に移住した。台湾とドイツで学習経験を積んだ後にオランダ国籍を取得し、1965年よりオランダで都市計画と建築の経験を積み、1975年からシンガポールのナショナル都市計画部門において活躍するようになり、ドイツ、オランダおよび東南アジアの多くの国と地域で実績を積んできている。
- 15 企画初期に70数カ所の名所が選ばれ、1989年に開園するまでに80点に増やした。それに1999年に、香港返還を記念する「香港回帰頌詩碑」と国内外の著名人による錦繡中華への賛美文や詩文が刻まれる「摩崖石刻」が増設されることによって、展示物は82点となった。現在の中国には23省、4つの直轄市と香港、マカオ二つの特別市がある。錦繡中華の中にある82の展示物は台湾を含む21の省と地域を代表している。東北部にある黒竜江省と吉林省が含まれていない。
- 16 香妃 (Fragrant Concubine) は、伝説上の人物で、18世紀に清の乾隆帝が戦で破ったウイグル部族から奪ってきた王妃。昭君は王昭君という中国歴史上四大美人のうちの一人、紀元前1世紀の前漢に生きた実在人物で、匈奴 (モンゴル高原に存在した遊牧国家) の呼韓邪単于に嫁いだ。香妃と昭君に関する物語は、古典の詩歌詞賦から、小説、演劇、映画、テレビドラマなど現代の流行作品に至るまで多く見られる。
- 17 1981年に中国紫金山天文台によって発見された3088号小惑星は、1991年に深圳の錦繡中華から名付けられた。